

本文に登場するものの主従関係の頂点は筆者、次に群衆、最後に象と、大きく三つに分けられるが、象のさかり狂い事件内で、筆者は本来の主従関係が逆転していることに気づく。

それは象によって踏み殺された人の描写、人々が逃げ惑う場面から、主従関係の逆転は始まる。事実上、その空間を支配しているのは象だった。象は人を殺すことで、^{サーヒブ}旦那（筆者）や^{クラー}苦力（群衆）という仕切りを無視して、主従関係の頂点にのし上がる。

象による死人が出た後、筆者はライフルを持って象との接触を試みるが、道中、群衆が筆者の後を追ってくる。そこで筆者と群衆の主従関係が逆転する。しかし元を辿れば、筆者だけでなく、群衆をも動かしているのは象なのだ。筆者が象に会う前に、既に主従関係は逆転し終えている。その時、頂点に象が君臨し、群衆、筆者の順に操られているのである。

そして筆者は象を撃つ。主従関係の最下位にいるものが、絶対君主を殺めた、なんとも衝撃的な状況ではあるが、その衝撃を筆者は読者に感じさせない。そもそも、群衆に笑われることを恐れていることに対して、象が人を操っていることは述べてすらいらないことから、筆者が最も恐れているのは群衆に見下されることではなく、実は象に見下されることであることではなかろうか。もちろん、象が人を直接的に見下すことはしないだろうが、そうであるからこそ、筆者はそれを恐れている自分を何よりも恥じたので、エッセイ内で取り扱わなかったと考えることもできる。

象が倒れた後、筆者は象の息づかいに恐れおののく。この場面は前項の、死刑囚の祈りの叫びを恐れる人々の場面と重なるが、筆者はその時から何ら変わっていないことを実感したのであると感じられる。

象を撃ったことを通じて、筆者は自分自身の人間性（何を恐れ、恥じているのか）を色濃く表現している。その点こそが、本文において一つ事件を描いていながらも、紛れもなくエッセイたらしめている。